

集

俳句フォーラム

2015年7月 第56号



鳥雲に

田中藤穂

芭蕉像 大川の春見渡して
生れたてのおたまじゃくしをみな覗く
春光に浮かびて川鶉水潜る
森下は 戦災の街 鳥雲に
生き伸びて春の深川吟行す

備忘録

浦川哲子

春愁や内ポケットの備忘録
ハイウエーの影大川に柳の芽
隅田川観光船の春の水尾
雪柳大川端に芭蕉の句
一片の花びら白し手の朧

春の波

平野無石

皆の眼が水平線へ缶焚火
梅東風や裏から詣る本門寺
芭翁の座像ゆらめく蝌蚪の水
墨堤や朽抗洗う春の波
舟速し花に余日の清州橋

春光

都築繁子

空四角ビルの谷間の初杜
松過ぎの巢鴨老人闊歩せり
梅の風奉安塔の由来よむ
春光や芭蕉稲荷の石蛙
隅田川上り下りの船は春

春

植木やす子

寿の軸掛け待つや明けの春
供養塔小さき地藏に黄水仙
折り紙の蝶折る指の悴みて
春浅し僧走り行き太鼓打つ
蛙の子未だ眠りの醒めやらず

紅

大山夏子

初景色 虚無僧の佇つ 深編み笠
庚申塚の三猿 赤き春着かな
紅白の匂い を運ぶ 梅に風
晩年の恋のごとくに 梅紅し
芭蕉庵 二月の十賊 伸び放題

白山句会吟行の一句

一月 巢鴨地藏通周辺

浦川哲子評

虚無僧の深網笠も初景色

夏子

人日の巢鴨地藏通りはそこそこに賑わっていた。風が冷たく足早に人が通り過ぎてゆく。通りの入口付近に虚無僧が立っていた。

深い網笠の中の顔は見えない。初景色というと瑞祥にあふれた自然の景を想像していたので、虚無僧の深網笠は新鮮であった。新しい年を迎えて、見ている景が何もかも改まって見えたのであろう。

同じ夏子さんの句で、「街道の地藏の笠の内も北風」の絶妙な観察力にも納得した。改めて吟行の意義を教

えられた

植木やす子評

褒められてかぶり直して冬帽子

哲子

多分、お友達とお出かけの時か、或いはどこかではつたりお会いになった時だろうか。

「そのお帽子、とてもお似合いよ。素敵ね」と褒められ、思わず帽子に手をやってかぶり直された様子が、大変微笑ましく感じられる。お褒めの言葉を素直に受け止められた女心を表されて、私には納得の一句でした。

二月 池上本門寺および池上梅園

平野無石評

梅の寺昼祈祷の太鼓鳴る

夏子

池上本門寺は境内が広い。道に迷いながら長い石段を昇り切ると、講堂の太鼓の力強い音が聞こえた。寺の周囲の紅白梅が見頃で、楽しい吟行であった。

観梅と、祈祷の太鼓がのどかに調和している句に感じ、頂いた次第である。



沈丁花

江口九星

雁帰る背に払暁の空を負い
何気なく通りし路の沈丁花
孫でできる知らせを受けて梅一輪
馬競う興奮さめぬ冬日向
凍つ空を鳥は果敢に列なして

空

大山夏子

大寒や鳶青空へ翼広げ
寒雀一羽降り来てみんな地に
春の空鳥影だんだん小さくなる
蠟梅の老木唱歌の顕彰碑
鼓草添えて土産の室鯨を

濤蒼し

関桂二

鋏杖に老父見守る畦焼きを
溜まり水そして枯蔓雀群れ
葉牡丹の闌けてはみ出す妻の鉢
北風吹いて波止越え来たる濤蒼し
天界の鷹大翼拡げけり

鰯料理

石川賢吾

地の酒を酌むや輪島の鰯料理
寒牡丹閉門告ぐるオルゴール
二月や灯りの消えぬ職員室
春寒しまだいとけなき雉の声
凧揚げや遥かに富士の夕日影

露の臺

渡辺節子

露の臺闌けて乱舞す荒れ庭で
沈丁の香の誘ないし幼き日
雪野茫洋雲の厚さを押す旭
冬枯れの石榴が枝に尼僧院
影ふみの遊びなつかし冬日かな

枯枝

中川のぼる

大都会の小雪幼き指はしゃぐ
枯枝の空一面に投影
酔い心地増して家路や朧の夜
風光る教室の窓残り香も
楼蘭の美女のはるかや黄沙降る

初霜

吉宇田麻衣

初霜の暗き境内鐘を突く
書初めや重ねた努力実を結び
初富士の白さまばゆさ引き締まる
子供らの俳句読み上げ春浅し
新卒の師駆け抜けて春の虹

